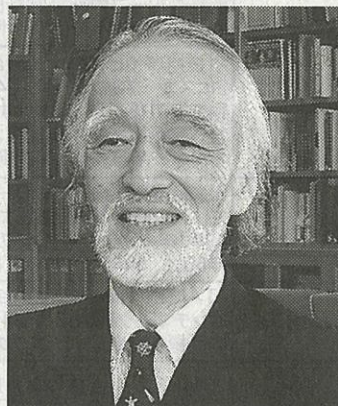


今秋めどに行動指針策定

日本建築家協会（JIA、六鹿正治会長）は、脱炭素社会の実現に向けて活動を加速する。8日から、建築家の意識を一層高めるため、オンラインで「2050カーボンニュートラル連続セミナー」をスタートした。六鹿会長は、「脱炭素への取り組みは喫緊の課題だ。現状を受け入れ、いま始めなければならぬ。しかもゆっくりにではだめだ」とし、今秋をめどに建築家が果たすべき役割などを盛り込んだ行動指針を策定して会員の意識の共有化を図り、「実践の速度を一層早めていく」と力を込める。日本建築士会連合会（近角真一会長）、日本建築士事務所協会連合会（児玉耕二会長）と連携したメッセージの発信についても検討する。

日本建築家協会
六鹿 正治会長



の取り組みを広く会員の共通認識として高いレベルで定着するきっかけにしたい」とセミナーの効果に期待を込める。

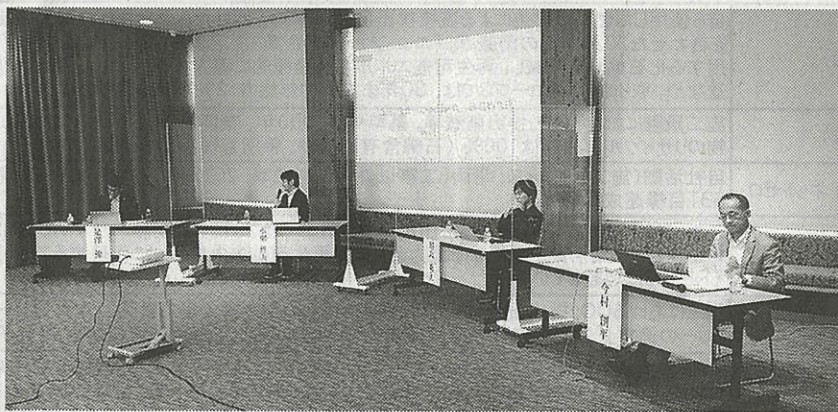
セミナーなどを通じて、会員の意識レベルを高めるとともに、建築家が果たすべき役割についての議論を深め、今秋をめどに行動指針を策定したい考えだ。

脱炭素社会の実現は、SDGs（持続可能な開発目標）に盛り込まれている17のゴールにも大きく関連している。設計から工事監理、維持管理、解体に伴う廃棄物の処理まで建築家は建築物の各フェーズに関わっている。

六鹿会長は、「建築物の寿命が終わった後のさまざまな廃棄物の環境汚染問題までを含めて、『つくる責任、使

JIA、脱炭素へ活動加速

う責任」を、多面的に考えていかなければならない」と持続可能な社会に向けた建築家の役割の大きさを強調する。



6月25日に開かれたSDGs建築フォーラム（東京都渋谷区の建築家会館）

「これまでは気持ちの良い建築を機能的に安全・安心にローコストでつくればよかったが、ナイーブに材料の出どころまで考えなければならぬ。良かれと思いつくったものが大量にエネルギーを使うということにならないように、従来以上に総合的に考えなければならぬ」と気を引き締める。

建築を構成する「強・用・美」の3要素は今後も変わることはない。これらの要素に加え、持続可能性が喫緊の課題となる中、建築が果たすべき役割も重要度を増している。

脱炭素社会の実現に向けて六鹿会長は、「それぞれの地域でキャリアを積んでいる会員も多い。最も得意とする分野で、社会的課題の解消に努めていくことが建築家のミッションでもある」とし、常に最新の知見を身に着けた上での実践の重要性を呼び掛ける。

「地球全体を人間が食い尽くしている状況にある中で、これ以上気温が上昇した場合、何をやっても無駄になってしまう」という危機感はある。もう後はない」。不転の覚悟で建築家の役割を果たす。

3会連携のメッセージも検討